

家族関係の認知に関する発達的研究 - Family System Test をもちいて -

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター

子どもが親との関係をどのように認知し、その認知がどのように変化するかを明らかにすることは、特に、親子の関係が質的に変化する児童、青年の行動や心理を把握する上で重要なことである。従来の親子関係研究は、父子関係、母子関係を独立して研究が行われてきたが、父、母、子の関係性のなかで親子関係を捉える研究が求められる。このような中で、家族成員の関係を捉えることが可能な Family System Test (以下、FAST) が開発された。FAST は、家族のメンバーを表す人形とブロックをボード上に配置することにより、家族関係の記述で重要な親密さと力関係から、家族の関係を測定する投影法的検査である。

本研究では、小学生、中学生、大学生を対象に、Family System Test を用いて、親密さと力関係の二視点から、家族関係の認知にどのような発達的变化が生じるかを検討した。また、FAST と質問紙調査を併用することで、FAST の指標である親密さと力関係について検討を加えた。

FAST を用いて家族関係の認知の発達的变化を検討した結果、日本においては発達差が認められなかった。二者関係 (父子間、母子間、父母間) によって差があることが明らかになった。

現実場面での親密さでは、父子間、母子間、父母間のいずれの家族内二者関係 (以下、二者関係) においても発達差は認められなかった。ところが、性差は認められ、女子が男子よりも母子間の親密さを高く表現していることが明らかになった。また、男子は大学生では、父母間の親密さを高く表現し、明確な世代間境界が存在することが明らかになったが、女子では、小学生、中学生、大学生において父子間の親密さよりも母子間の親密さが高く、世代間境界があいまいな家族が多くみられた。この結果は、アメリカでの研究結果 (Feldman & Gehring, 1988) と異なるもので、文化的差異が指摘された。このことは、日本の女子は、青年期においても母親との心理的に密着した関係を維持しながら成長の過程を歩む (加藤・高木, 1980) とする日本の母子関係 (母娘関係) の密着性の高さが示されたのではないかと推察される。

現実場面の力関係においても、父子間、母子間、父母間のいずれの家族内二者関係 (以下、二者関係) においても発達差は認められなかった。児童期は親の力を大きく表現し、加齢に伴い父子間、母子間の親密さが低くなるというアメリカでの研究結果 (Feldman & Gehring, 1988) と異なり、小学生でもそれほど親子間の力の差を大きく表現していなかった。

以上のように、FAST において家族関係の認知に関する発達差は認められなかったため、加齢に伴い、親密さは低くなり、力関係は小さくなるという仮説は支持されなかった。年齢を超えて、母子密着傾向によるあいまいな世代間境界が女子にみられることが明らかになり、文化的差異が指摘された。

次に、FAST と質問紙調査を併用することで、FAST における現実場面の親密さが、家族のコミュニケーション、関係の良さと関連があることが明らかになった。他方、FAST における力関係は、親密さほど関連はなかった。これは、FAST の人形間の距離が、意識レベルでとらえている家族の関係を反映し、家族の親密さを測定する指標として有効であることが指示されたと思われる。力関係の指標に関しては、今後さらに検討していく必要がある。また、FAST と質問紙調査との関連より、親子関係と父母関係は密接なつながりがあることが明らかになった。これは、家族システムの中で親子関係や父母関係を捉えていく必要があることを示している。

本研究において、FAST を用いて家族関係認知の発達的变化について研究を行った結果、親密さと力関係という二視点からは、発達による差は認められなかった。この結果より、年齢を超えても家族関係 FAST を用いることができる可能性があることを示唆していると肯定的に捉えた。家族関係の認知は、年齢を超えて家族内二者関係や性別などによって異なることが明らかになった。また、欧米での研究と比較検討することで文化的要因が浮び上がってきたので、文化的差異を考慮しながら日本での FAST の妥当性について今後さらに検討していく必要がある。